

博士論文特集にあたって —博士論文に見る研究テーマの動向—

角所 考
(関西学院大学理工学部)

矢入 健久
(東京大学先端科学技術研究センター)

本学会では、毎年1月号の本特集で、過去1年間に人工知能に関連する研究で博士の学位を授与された方々の博士論文の概要を紹介させていただいている。このような特集の企画意図の一つは、異なる世代の研究者間の交流やAI分野の研究動向把握のための機会を提供することである。博士論文は、若手研究者にとって最初のまとまった研究成果であるため、上の世代の研究者との交流を図るうえで格好の材料になり得ると思われるが、その具体的な内容は、部分ごとには学術論文として発表されているものの、それらをもとにした博士論文全体としてのストーリーまでを把握することは難しい。かといって、博士論文自体が関連研究者の目に触れる機会も多いとはいえない。一方、若手研究者が新規に手掛ける博士論文の研究内容は、当該分野における最先端の研究テーマとなっている場合も多く、上の世代の研究者にとっても、その概要を把握できることは、分野全体の研究動向を知るうえで有用と思われる。以上のようなことを考慮して、本特集では、AI分野の将来を担う若手研究者の博士論文の概要を、プロフィールとともに掲載させていただいている。

このような企画が始まったのは2000年1月号からで、したがって今回が16回目ということになる。例年、30件前後のご応募をいただいていたが、昨年は20件を切るまでに減少した。最近では、博士学位取得者のポスト不足の影響により、博士課程への進学者数が減少傾向にあるという話もときどき耳にすることから、昨年の件数がそれを裏付けるものなのか、あるいは単なる一時的なものなのかを判断するうえで、今回の応募件数には特に注目していたが、幸い28件のご応募をいただき、例年並みに持ち直したことから、やや安心している。応募いただいた方々、ならびに応募にご協力いただいた関係者の先生方にはこの場を借りて厚くお礼を申し上げる。

本特集への応募にあたっては、博士論文の該当分野を、本学会論文誌の分野一覧の大分類項目と小分類項目の中からそれぞれ一つ選択いただいている。これに基づいて分野ごとの応募件数とその応募総数に対する比率を過去4回分の数値とともに以下に示す(括弧内は順に15回、14回、13回、12回の件数を示す)。

1. 基礎・理論：0 (0, 1, 2, 1)
 2. 機械学習・データマイニング：1 (3, 9, 0, 2)
 3. 知識の利用と共有：4 (0, 1, 3, 1)
 4. Web インテリジェンス：4 (2, 5, 0, 3)
 5. エージェント：2 (0, 2, 2, 1)
 6. ソフトコンピューティング：1 (3, 4, 1, 0)
 7. 自然言語処理：5 (5, 4, 5, 9)
 8. 画像・音声：8 (4, 2, 3, 2)
 9. ロボットと実世界：0 (0, 3, 3, 2)
 10. ヒューマンインタフェース・教育支援：3 (2, 3, 4, 6)
 11. AI 応用：0 (0, 0, 3, 2)
- * 応募総数：28 (19, 34, 26, 29)

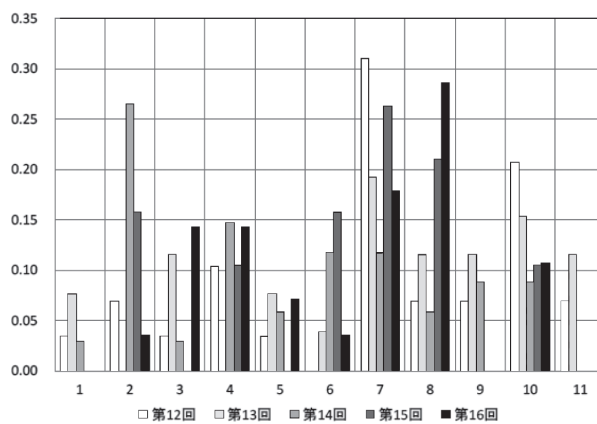


図1 各回における掲載論文の分野ごとの件数の割合

昨年に続き、基礎・理論、ロボットと実世界、AI 応用の3項目に該当するものがなかったが、このうち、基礎・理論とAI 応用については、応募者が、他のより具体的な内容の項目を選択するようになっている可能性も考えられる。一方、ロボット・実世界に関しては、同じ実世界に関わる項目として、画像・音声の件数は多いことから、ロボット関係の分野へのアナウンスが不足しているのかもしれない。

本特集の募集は、会告や各種メーリングリストなどでアナウンスさせていただいているが、次回以降も関係各位のご協力をぜひお願いしたい。